

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：12102

研究種目：新学術領域研究(研究領域提案型)

研究期間：2018～2022

課題番号：18H05449

研究課題名(和文)西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究

研究課題名(英文)A planning study on the multilayered urban fabric in the Western Asia

研究代表者

松原 康介(MATSUBARA, KOSUKE)

筑波大学・システム情報系・准教授

研究者番号：00548084

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 41,650,000円

研究成果の概要(和文):現代都市計画は、古代遺産が市街地内に存在し特に住民が住んでいる場合に必要性が高く、ダマスカス、アレppoの他、各地で重層的空間が形成・継承されてきた。また、乾燥地帯ゆえのオアシス水利用の技術が現代に生きていた。都市計画の新自由主義的側面への問題提起から、(官製)都市計画だけでなく住民による空間形成に光が当てられ、ベイルートの事例で実証された。観光化と共に進展するジェントリフィケーションとグローバル・モビリティによる管理保全も明らかになった。古代都市カッパドキアにおける聖シメオン教会を事例に、遺構保全のため、理化学的手法から検証がなされた。変化する「都市文明の本質」に基づく都市計画論を提案する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本計画研究は、一連の計画研究の最後(6班)にあつて、建築・都市計画、文化人類学、文化財科学という、主として現代の課題や事象を扱う研究者から構成された。考古学や石板文献史学の成果を、なお現代において受け止め、社会に活かしていくことの重要性が確認された。また、これらの知見を震災・戦災からの復興都市計画へと還元することも重要である。これは地域の人々の主体性を尊重した国際協力戦略の形をとる必要があり、本研究で得られた往古の都市文明の成り立ちと現代都市計画への応用に関わる知見と、住民参加、持続可能な発展といった既存の理念を組み合わせることで推進する必要がある。

研究成果の概要(英文):Modern urban planning is highly necessary when ancient heritage exists within the urban area, especially when it is inhabited. Multilayered spaces have been formed and inherited in Damascus, Aleppo, and other places. In addition, the traditional technology of oasis water utilization due to the arid region has been kept alive in the modern era. The issue of the neoliberal aspect of urban planning has shed light on the spatial formation not only by (official) urban planning but also by residents, as demonstrated in the case of Beirut. Gentrification and global mobility for management and preservation, which are advancing along with tourism, were also revealed. Long-term trials and errors from physical and chemical methods were made for the conservation of the remains of the Church of St. Simeon in the ancient city of Cappadocia as a case study. We propose an urban planning theory based on the changing "The essence of urban civilization".

研究分野：中東・北アフリカ地域の建築・都市計画史

キーワード：都市空間の重層性 国際協力 ヘレニズム イスラーム ダマスカス ジェントリフィケーション グローバル・モビリティ 伝統的水利システム

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

領域各班による一連の考古学的・歴史学的研究の進捗を踏まえつつ、本研究では、現代的視点から都市文明の本質に光をあてる。西アジア地域には、数千年の歴史を誇る魅力的な都市が多く存在する。歴史都市は、形成と破壊を繰り返しながら今日に至った。稠密な都市空間に採光と通風をもたらす中庭や、住民のプライバシーを守る袋小路、キリスト教会とモスクの隣接・連携した空間は、地域に固有の生活文化の受け皿としても重要である。また、歴史の途上において破壊、廃棄され、今日では遺跡を残すのみとなった都市空間もまた、かつて多様な文化が共生し重層的に蓄積されてきたことを証言する文化遺産として意義を持つものである。すなわち歴史都市に対する現代的視点からのアプローチとは、具体的には、都市を現代社会において位置づけ、保全・継承していくための展望を得ることを意味する。

2. 研究の目的

西アジアの歴史都市は、その起源は考古学時代に遡り、アッシリアやペルシア、ヘレニズム（ギリシャ・ローマ）時代、そしてイスラーム時代を経て現代まで続いてきた。これは年代が異なるというだけでなく、学術分野としても異なっており、一貫したパースペクティブを築くという試みは殆どなかった。本研究は、都市を現前性において計画していくという視点から、都市空間に今なお残っている様々な遺産や痕跡を手掛かりに、形成と変容、破壊と廃棄、再生と持続の結果としての都市空間の重層性のあり方を明らかにする。そこから、都市の計画的拡張や、歴史的空間の保全、多様な価値観の共存をもたらすレジリエンス、防災・復興と国際協力といった、広義の都市計画の課題を展望する。

3. 研究の方法

本研究では、建築・都市計画学を中心に、文化人類学、文化財科学との共同研究によって推進する。方法論については、コロナ禍における現地調査計画の縮減を受けて、文献研究を中心に実施する方針に変更した。当初計画から、分担者を中心に人員拡充を行い、中間評価までに、(1)旧市街の開削道路と空間整備の歴史的評価－西アジア・アーバニズム（根幹研究）、(2)新自由主義の都市計画と住民活動の人類学的研究（基幹的研究）、(3)考古学遺産の位置づけと活用、(4)地域比較と文化交流にみる都市史研究、(5)アルジェリアとトルコのスラム政策－ビドンヴィールとゲジェコンドゥ、(6)乾燥地帯の水利技術と庭園文化のデザイン、(7)文化遺産の劣化と構成材料に関する理化学的調査（基幹的研究）、(8)日本・東アジア・中央アジア・南アジア・カフカース・ヨーロッパとの地域比較（レビュー的研究）、(9)震災・戦災と都市復興協力の展望（レビュー的研究）、の9項目を具体的な実施テーマとして掲げた。

個別具体の成果の実際は、代表者及び各分担者、協力者らがそれぞれ発表した学術論文、学術書に現れているが、本報告では、以下で上記9項目に基づき概括した後、総括的記述を加える。

4. 研究成果

(1)旧市街の開削道路と空間整備の歴史的評価－西アジア・アーバニズム（根幹研究）

共同研究の成果の一つに、ロス・バーンズ（著）松原康介（編訳）による『ダマスクス 都市の物語』『アレppo 都市の物語』（いずれも中央公論美術出版、2023年）がある。本書は、シリアの建築・都市遺産の研究をライフワークとしてきた著者による、考古学時代から現代までを一貫する都市通史である点で、本研究における基礎資料となりえる。翻訳作業を通じて関連する既往研究を精査できる点で、異分野間の共通認識の醸成をはかった。

一方で、アレppo及びダマスクスについては、1960～70年代にかけて日本人国連専門家・番匠谷堯二が参画しての都市基本計画が策定されていた。番匠谷は清家清の門弟出身の都市計画家であり、住宅作家としては家族の変容に伴って進化する「正方形の家」を目白で実現し、パリのATBATでその研究を続けていた。アルジェでは都市計画を業務とし、スラム→Cité de Recasement（緊急避難住宅）→HLM（廉価住宅）へと住民を移転させるスラム事業においては緊急避難住宅を担当し、住民が都市住宅での生活様式を段階的に身に付けられるような、やはり進化型の計画論を追求していた。番匠谷が計画策定直後に建築学会誌で発表した「シリアにおける都市の形成」を読むと、まさに考古学時代からヘレニズム、イスラームを経て現代に至るまでの過程が概括され、都市空間の重層性が明瞭に意識された上で、都市問題と都市計画の要点が述べられている。番匠谷がミシェル・エコシャールらと共に策定した両都市の旧市街整備計画（ダマスクス：1968年、アレppo：1973年）は、車道の計画が破壊的であるとする批判もなされてきたが、計画図書等を精査すると、道路計画はヘレニズム基盤の利活用を兼ねるという、批判において取り上げられてこなかった重要なコンセプトが見えてくる。番匠谷が、住民自身が生活様態に即して空間を変化させていくことを許容し推奨するという計画論の持ち主であったとすれば、旧市街における道路開削は、過度に稠密化し多くの都市問題を抱えていた旧市街から、歴史が浅く実際に低質な零細建築物を除去することでヘレニズムの遺構を露出（デガジュマン）させる、都市空間の重層性を活かした空間整備を目指していたものであると再評価できる可能性がある。

そこで1968年計画を総合的な都市デザインの視点から検討した。交通や人口増加、無秩序な

都市の拡大といった都市問題の解決を同時にはかる野心的な計画であり、その提案は、都市拡張の範囲、グータの拡張、都市拡張に箍をはめる手段としてのグータの保存、国外までも視野に入れた交通道路網、歴史的環境保全・景観形成等、多岐に及んでいたことが明らかとなった。

更に、ダマスクスの交通行動について目的、交通手段の地域による違いを分析した。その結果トリップ目的については、郊外で通学トリップが多いこと、郊外から都心へ通勤するトリップが多いこと等、東京都市圏と似た傾向がみられた。また、交通手段については、鉄道網が未整備であることもあり、Microbus（ワゴン車により決められた路線を多頻度運行するサービス）の分担率が高いほか、旧市街と郊外での内々トリップでは徒歩の分担率が高い等の傾向がみられた。利用したPT 調査の実施時点では若年層が非常に多い人口構成であったが、数十年後には高齢化することが想定されている。現在ダマスクスではサービスの利用が多いが、少人数乗り・多頻度運行であるが故、サービスによる道路混雑が課題となっている。シリアは2011年から始まった内戦下にあるが、今後復興とあわせ、将来を見据えた公共交通体系の構築が望まれる。なお、オールド・ダマスクスの街路網については、いわゆる観光ルートの提案もなされており、特に「古典古代の道」には1968年計画で目指されたものと共通する理念があることもわかった。

(2) 新自由主義の都市計画と住民活動の人類学的研究（基幹的研究）

都市の人類学は、都市で展開する事例を現在進行形で捉え、そこに現れている多様な関係性を追いかけて、そうした関係性のほつれた糸の端を見出し、未来に向けて新たな（あるいは古い）つながりを付け加えようとする。それは都市を形作るモノや確定した事態の帯びる「固さ」を揺さぶり、都市の変化の潜在的な可能性に再び光を当てようとする試みである。例えば、イスタンブールの耐震都市再開発プロジェクトでは、プロジェクトの進捗の遅れ、住民参加の難しさ、立ち退きに対する不安といった、様々な人々の思いと活動がその裏面に生じていた。都市計画の性急な特徴を、新自由主義の都市計画と総括することができる。

新自由主義の都市計画の事例として、かつてオスマン・トルコ帝国の主要港の一つであり、帝国解体後に内戦で無人地帯と化したベイルートのダウントウンを取りあげ、復興のプロセスと現在の停滞の要因について検討した。復興はレバノンの首都としてのベイルートの地位を回復させようと国家的規模で行われたが、近年はダウントウンを訪れる観光客は減少しており、シリア内戦を契機とする地域の不安定な状況やその他の関連する諸問題によって悪化していることが明らかとなった。とりわけ、新自由主義と関連する計画政策が衰退と関連していた。

(3) 考古学遺産の位置づけと活用

都市における観光産業の発展の事例としてアンタルヤ旧市街カレイチを取り上げた。1970年代からトルコ政府によって観光を見据えた史跡や歴史的景観整備が始まり、古代以来の港が修復整備された。しかし、聞き取り調査からは、観光施設が未整備だったことや、廃墟が犯罪の温床となっていたことがわかった。2000年代に入ると、通りは石畳に置き換えられ、旧市街の家屋がホテルやレストランへの転用・再建される一方、そこに暮らしていた低収入の人々がカレイチの外に次々と引っ越すようになった。このように2000年代以降のカレイチの観光開発はジェントリフィケーションを伴いながら進んでいったことがわかった。

また、ヨルダン・マグタスを対象に、キリスト教諸派による宗教遺産への関与に光をあてた。キリスト教関連遺産が発展した背景として、ヨルダン王家による積極的な関与があった。岩のドームとアル＝アクサー・モスクを擁するエルサレム旧市街の一神教関連の遺産の管理権がその正当性の源泉である。1995年にヨルダン川西岸地区において古代キリスト教関連遺産が発見されると、国際的な援助を受けつつ王家が関与を深めた。2000年のローマ教皇ヨハネ・パウロ2世の来訪を初めとし、各派の教会や修道院を誘致し聖職者や巡礼者を集積させるといった、国際的な依存関係に基づくグローバル・モビリティこそが、現代的な宗教の姿であることがわかった。

(4) 地域比較と文化交流にみる都市史研究

オスマン都市史・建築史の視点から前近代イスタンブールの海上交通を考察し、オスマン朝の法廷が膨大に残した法廷台帳や各種の記録を繙くと、船と海上交通というハード面だけではなく、営業権委託と貢加金徴収やワクフ財としてのペレメ等、ソフト面でもオスマン朝の行政の実効性がわかった。16世紀ユスキュダルでは、モスク等の財源としてペレメが存在しており、その業務委託の見返りとして高額の賃料が払われていた。陸にくらべて管理が行き届きにくい海を舞台として、イスタンブールの人々が様々な生業を成立させていたことを明らかにした。

また、ローマ都市アイザノイにおける小アジア土着信仰と建築、都市の関係の検討では、旧都市計画に従うギリシア的都市空間の整備が進められ、後2世紀半ば以降は、既存市街地の周囲にグリッド状の新都市計画を有するローマ的市街地を整備されたことがわかった。都市計画基準としてステウノス洞が参照されていたアイザノイの事例は、都市とキュベレの具体的関係の一例を示すと同時に、ギリシアの神々や皇帝への信仰が定着していたヘレニズム・ローマ時代の小アジア都市において、土着信仰がなお都市構成原理の基層にあったことを示している。

(5) アルジェリアとトルコのスラム政策-ビドンヴィールとゲジェコンドウ

1950年代までアルジェに存在したマヒーディンのビドンヴィールについて、CIAMアルジェの展示パネルを基に考察した。農民が村を離れて都市に流入する際、新規参入者の吸収と組織化、土地やバラックの有料化、税金の賦課、土地所有の格差が認められた。また、バラックの混雑、不衛生な便所、医療施設不足等、ビドンヴィールの生活環境の劣悪さがリアルに描写されており、住民の出自に由来する地域文化の多様性、一部に大通りがある公私の空間構成、中庭を中心とした住戸の空間構成等、ビドンヴィールにも集住的生活環境が構築されていたことがわかった。

一方、トルコについては、新自由主義と再開発という大きなテーマの下にゲジェコンドウが位置づけられてきた。住民の貧困化（クライエントリズムによる国家資源再分配の困難；互酬関係の衰退）、社会的排除（保護の対象から危険な他者へ；表象の変化）、再開発反対運動等がこれまでのゲジェコンドウ研究の主要なテーマであることがわかった。アルジェリアのビドンヴィール事業では、再開発の前段階において Cité de Recasement への移住と都市生活様式の訓練というプロセスを経ており、ゲジェコンドウとの更なる比較からそれぞれの特徴を明らかにできよう。

(6) 乾燥地帯の水利技術と庭園文化のデザイン

スペインの地中海都市バレンシアに焦点を当て、歴史的な水利システムと最近の都市構造との関係を考察した。20世紀前半、歴史的な中心は均質な基盤の目状に急速に拡大する中で灌漑用水路が継承された。20世紀後半になると運河は市街化区域のほとんどで消滅したが、現地調査からは運河の地形的・地質的な特徴が現在の都市空間に継承されていることがわかった。更に、歴史的な用水路によって、現在の都市部の空間構造と以前の農村景観とのつながりが生きること、また都市と農村との相互作用が明らかとなった。

アルジェリアのガルダイア県ムザブの谷を対象としては、乾燥地帯故に洪水被害を被って来たオアシス集落における伝統的水利技術のあり方を明らかにした。集落の持続可能性を支えているのがオアシスであり、「夏の町」としての避暑地としての役割だけでなく、経済基盤や防衛、洪水対策を通じたコミュニティの連帯強化といった多様な側面を有していた。都市内部では井戸を用いて地下水を汲み上げ利用し、生活排水は肥料等として活用された。水や木材といった希少な資源を無駄にすることなく消費を必要最小限にとどめるための工夫も明らかとなった。

(7) 文化遺産の劣化と構成材料に関する理化学的調査（基幹的研究）

カッパドキアの都市景観のなかに、ビザンティン期の教会群があり、中でも文化財として高い価値を有しているのが教会内部の壁画である。その製作技法、材料について自然科学的に明らかにするとともに、保存状態について調査、解析をおこない、保存修復のための基礎データを構築を目指した。聖ニキタス教会の壁画の場合は、抗体抗原反応を利用した ELISA 法や、Nano-LC-ESI-MS/MS 法により、膠着材分析をおこなったところ、壁画の中には、多糖類や膠等、タンパク質を含んだ有機物はまったく検出されなかった。この教会の壁画は、検出可能な濃度の有機物質を含まない絵具で描かれたものであろうと想定され、その結果、経年の影響により、顔料粒子が物理的に取れやすい状態であるために、彩色層が年々薄くなっているのではないかと考えられた。また、聖シメオン教会の壁画の特徴は、いたるところに書かれたいわゆる「落書き」であろう。Hagios Hosios Symeon（聖シメオン）に対するグラフィティも含まれている。古典ギリシア語、アラビア語、トルコ語で落書きがなされているが、とくに古手の祈りの言葉等は、かつて聖シメオン教会が人気の巡礼地であり、多くの信者が訪れたことの証明でもあり、写真記録をとった。

聖シメオンに対しては、彩色を施した教会堂を設立するためパトロンがつき、柱上聖人シメオンという独特な聖人として中世に人気を博した。後陣のドームには、キリストが座し、天使に取り囲まれている「マイエスタス・ドミニ」が描かれている。この図像は、カッパドキアにおいて、9世紀後半から10世紀初頭にかけての後陣装飾の標準的な様式であることがわかった。

(8) 日本・東アジア・中央アジア・南アジア・カフカース・ヨーロッパとの地域比較（レビュー研究）

日本の事例として、原爆被災を受けた広島においては、戦災復興計画の進展と並行する形で、商店街の元店主らによって復興、活性化されていた。これはまさしく住民による空間形成であり、ベイルート等で顕在化している新自由主義の都市計画との対照事例と位置付けられる。

「イスラーム都市」論の観点からは、ウズベキスタンのヒヴァの都市形成史に焦点をあてた。内城の城壁は現在、元の状態に復元されているが、外城も城壁で囲まれていたことがわかった。ヒヴァの王宮がその時代に書いた年代記や、1873年のロシア軍侵攻時の聞き取り調査記録から、外城の城壁は新しく築かれたものである。ヒヴァには伝統的な中央アジアの都市の趣が残っている。これはアムダリヤ川の流路が変化し、洪水等の環境変化にさらされながらオアシスを移動してきた人々が、18世紀後半に現在地にたどり着き、都市発展に力を注いだためである。

アルジェリア人にとってのカスバが持つ象徴的意味の変遷についての分析では、抵抗する都市というカスバのイメージは、伝統的な家、そして家に属するものとしての女性を内包しており、

ネイションの道徳、独自の文化、不可侵の精神性の象徴でもあった。カスバの都市イメージの構築には、オリエンタリズム、並びにナショナリズムという政治的な変数が大きくかかわっているがゆえに、男女の空間分離を純粹にイスラームに基づき論じるだけでは、高度に政治化した近現代の都市を読み解く分析としては不十分なものであることが明らかとなった。

20 世紀前半イスタンブールにおけるプロスト案とブヴァール案の比較都市計画史からは、前者は「理想」よりも「現実」あるいは「美化」よりも「改良」という後者の真逆の提案となり、その大半が第二次大戦を挟み実施されたことがわかった。両者はフランスから中東、北アフリカ諸国に都市計画を輸出した代表者で、「理想」と「現実」はイスタンブール以外の都市でも同様である。20 世紀前半の都市の近代化、西洋化、そしてユルバニズムの進化が明らかとなった。

ヨーロッパ都市計画のエジプトへの伝播の事例として、20 世紀初頭の近代都市ヘリオポリスの都市計画史を考察した。ヘリオポリスは田園都市(Citésjardins)と紹介されることもあるが、大聖堂を中心にピラミッド大通りを主軸とするオアシスの都市の構成、ミュゼ・ソシアルによる田園都市の輸入、最初の田園都市「シュマン・ド・ヴェール」の建設時期等を考慮すると、イギリスよりもむしろフランスの都市計画に基づき検討され実現した衛星都市である。

(9) 震災・戦災と都市復興協力の展望（レビュー研究）

本研究期間の最後に、2023 年 2 月 6 日早朝にトルコ・シリア大地震が発生し、4 万人規模の人が亡くなる大災害となった。カッパドキア近傍でも、2 月末に中規模の地震が誘発されており、今後の状況を注視する必要がある。地震災害以外にも、繰り返される内戦、戦争、不安定な政権運営、複雑な宗教事情、民族事情、部族社会の構図等、どの要素も西アジアの社会に深くかかわる性質であり、それらと対峙しない限り、古代の様相にも本質的に迫ることは困難であろう。重層的な多様な文化の痕跡のうち、どの部分が残され、どの部分が失われてしまうのか、その過程も詳らかに歴史の証拠として記憶していく必要がある。

戦災復興対応としては、国際協力の視点から、シリア紛争を事例に平和構築の取り組みを分析した。リベラルな平和構築アプローチに基づく外部の介入は、国際的な専門家を通じ、武力紛争の根本原因に対処してきたが、複雑性が時間と共に増していった武力紛争には対処できなかった。これに対し、文脈に即したアプローチは、より持続可能な平和構築のために、地域の主体性を重視する。すなわち外部のアクターが紛争の利害関係者ではなく、和平プロセスのファシリテーターとなることを促すことで、シリア人の自主性を持続させる可能性を秘めている。

本領域研究は、考古学及び石板文献史学、自然科学及びエジプト学、東洋史から、太古の歴史を誇る西アジアの「都市の本質」に迫るものである。そして本計画研究は、一連の計画研究の最後（6 班）にあって、建築・都市計画、文化人類学、文化財科学という、主として現代の課題・事象を扱う研究から構成された。考古学や石板文献史学の壮大さに、正直圧倒されつつ、なお現代において都市遺産を受け止め、社会に活かしていくことの重要性もまた改めて確信した。

上からの（官製）都市計画をいわば批判・吟味するのが文化人類学であり、都市計画を住民自身による身近な空間形成のレベルまで還元する。一方、どんなに偉大な、まさに考古学的時代からの都市計画であっても時間の経過による老朽化・風化からは免れず、その物理的保存のために文化財科学の知見が不可欠である。6 班における「都市の本質」とは、「変化すること」そのものであった。3 分野の大枠の下で、建築・都市計画分野においては、古代からの遺産が市街地内に存在し、特に今でも住民が住んでいる場合に必要性が高く、ダマスカス、アレppoの他、トルコ、アルジェリア、エジプト、ウズベキスタン等の諸都市で事例研究がなされた。いずれも、様々な交流の結果としての重層的空間構成を有していた。また、乾燥地帯であるため蓄積されてきた水利用の技術や知恵が現代に生きていることも明らかとなった。文化人類学分野では、住民に向き合うことなく進展する都市計画の新自由主義的側面があぶり出され、イスタンブールの耐震都市計画やゲジェコンドゥのクリアランス事業が問題提起された。バイルートの事例はこれを都市計画の視点から実証するものである。また、観光化と共に進展するジェントリフィケーションとグローバル・モビリティによる管理保全の様相解明も人類学的成果である。文化財科学分野では、古代都市カッパドキアにおける聖シメオン教会を事例に、現存する遺構の即物的保全のため、理化学的手法から長期的な試行錯誤がなされた。ヴァンダリズムもまた資料であり、保全の取捨選択の対象となりうる点で、重層的空間の問題と切り離せない。

総じて、これらの知見を震災・戦災からの復興都市計画へと還元することも重要である。これは地域の人々の主体性を尊重した国際協力戦略の形をとる必要があり、本研究で示された知見と、住民参加、持続可能な発展といった理念を組み合わせることで推進する必要がある。なお最後に、長引く内戦による戦災と、トルコ・シリア大地震によって大きな被害を受けたシリアに、代表者が 2023 年 9 月に国連開発計画の専門家として入国を果たし、ダマスカス及びハマーにおいて、シリア人専門家らと協働しての調査とワークショップを実施した。個別の成果は取りまとめ中ではあるが、本新学術領域研究における成果が大きく役立ったことを付記しておきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 13件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 Matsubara Kosuke	4. 巻 5
2. 論文標題 An examination of the three districts in Algiers by Fernand Pouillon as Moorish architecture: Research on dwelling practice around the “bidonville (shantytown)” project in Algiers during the Late Colonial Period, Part 2	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JAPAN ARCHITECTURAL REVIEW	6. 最初と最後の頁 458～473
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/2475-8876.12279	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Hu Jiahui、Matsubara Kosuke	4. 巻 1
2. 論文標題 Development of French inspired urban architecture with the construction of the Yunnan-Vietnam Railway: a case study of Kunming city based on literature survey	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Asian Architecture and Building Engineering	6. 最初と最後の頁 1～36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/13467581.2022.2153054	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Alkazei Allam、Matsubara Kosuke	4. 巻 22
2. 論文標題 The role of reconstruction planning and shop owners' contribution in the post-war transformation and revival of vitality in Hiroshima Hondori Shotengai	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Asian Architecture and Building Engineering	6. 最初と最後の頁 425～451
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/13467581.2022.2046587	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Shioya Akifumi	4. 巻 10
2. 論文標題 The Treaty of Ghulja reconsidered: Imperial Russian diplomacy toward Qing China in 1851	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Eurasian Studies	6. 最初と最後の頁 147～158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/1879366519842882	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松原 康介	4. 巻 54
2. 論文標題 ダマスカス1968年計画におけるヘレニズム基盤の再構築事業	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 都市計画論文集	6. 最初と最後の頁 630 ~ 637
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11361/journalcpj.54.630	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松原 康介	4. 巻 84
2. 論文標題 戦後仏語圏における「最大多数のための住まい」から「進化型住宅」への展開 -ATBAT (建造者アトリエ) の国際・地域交流活動の歴史的経緯に関する研究 その2-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 1473 ~ 1483
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.84.1473	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川本智史	4. 巻 6
2. 論文標題 船が買いたい! 前近代イスタンブルと海上交通	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 都市史研究	6. 最初と最後の頁 74 ~ 83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本智史	4. 巻 728-261
2. 論文標題 研究フォーラム トルコ建築史・都市史	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史と地理 世界史の研究	6. 最初と最後の頁 51 ~ 54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Taniguchi Yoko, Iba Chiemi, Koizumi Keigo, Temur Hatice, Yalcinkaya Ugur, Acikgoz Fazil, Gulyaz Murat	4. 巻 36
2. 論文標題 Scientific Research for Conservation of Rock hewn church, Uzumlu (Cappadocia) in 2016: Chapel of Niketas the Stylitis in Red Valley	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Arastirma Sonuclarii Toplantisi	6. 最初と最後の頁 529 ~ 550
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 松原 康介	4. 巻 84(760)
2. 論文標題 戦後仏語圏における「最大多数のための住まい」から「進化型住宅」への展開 -ATBAT (建造者アトリエ)の国際・地域交流活動の歴史的経緯に関する研究 その2-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 1473 ~ 1483
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.84.1473	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松原 康介	4. 巻 5
2. 論文標題 アルジェ・植民都市計画の変遷 -モダニズムの地域性-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 都市史研究	6. 最初と最後の頁 55 ~ 65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村周平	4. 巻 83(3)
2. 論文標題 序 インフラを見る、インフラとして見る	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 377 ~ 384
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高嶋美穂; 苅野茉央; 中沢隆; 谷口, 陽子; 西坂朗子; ジダン, アイーサ	4. 巻 7
2. 論文標題 クフ王第2 の船出土遺物の有機物質の分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 昌平エジプト考古学会紀要	6. 最初と最後の頁 11~20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Kosuke Matsubara
2. 発表標題 The Project for the Reconstitution of Hellenistic Infrastructure as Suggested by the 1968 Master Plan for Damascus
3. 学会等名 Tablitz Ivent MA “ In-Between ” (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松原康介
2. 発表標題 清家清の計画論の「進化型」住宅としての位置づけについて- NHK番組アーカイブス学術利用トライアル調査から-
3. 学会等名 2022年度日本建築学会 (北海道) 学術講演会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡邊智也
2. 発表標題 カミロ・ジッテの都市計画実作に関する研究
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 橋本涼太
2. 発表標題 ポルトガル植民地期におけるリオ・デ・ジャネイロの都市形成
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 戸田理香子
2. 発表標題 戦後パリ郊外におけるフェルナン・ピヨンの団地計画 -マルセイユ及びアルジェの作品との比較から -
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 古市麻菜子
2. 発表標題 パリのグラン・プロジェにおける政治理念と都市空間の変容
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉田悠乃
2. 発表標題 マルセイユの都市空間整備にみる多文化的特徴 - 3区・サン＝モーロン都市再生プロジェクトを事例として
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kosuke Matsubara
2. 発表標題 Islamic Mixed Use of the medina of Fez -A case study of the Guerniz quarter
3. 学会等名 The 1st international conference on Islamic and sustainable innovation of urban and regional planning (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kosuke Matsubara
2. 発表標題 The master plan of Damascus elaborated by Michel Ecochard and Gyoji Banshoya in 1968
3. 学会等名 International Policy Forum for Urban Growth and Conservation (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akifumi Shioya
2. 発表標題 Khiva: An Islamic City on the Silk Road
3. 学会等名 International Policy Forum for Urban Growth and Conservation (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Allam Alkazei and Kosuke Matsubara
2. 発表標題 A Study on the Relation Between Street Vitality and Reconstruction Planning in a War-damaged Central Area -The Case of Central Beirut after the Lebanese Civil War-
3. 学会等名 International Policy Forum for Urban Growth and Conservation (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Allam Alkazei and Kosuke Matsubara
2. 発表標題 The Impact of Reconstruction Planning on Urban vitality: The Case of Downtown Beirut after the Lebanese Civil War
3. 学会等名 Summaries of technical papers of Annual Meeting 2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川本智史
2. 発表標題 13～15世紀アナトリア諸王朝の宮殿における高層建造物とその展開
3. 学会等名 2019年度日本建築学会学術講演梗概集
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松原康介
2. 発表標題 ジオルジュ・キャンディリスの計画論「進化型住宅」における番匠谷堯二の貢献について
3. 学会等名 2019年度日本建築学会学術講演梗概集
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Eisuke Tanaka
2. 発表標題 Connecting Ancient Ruins with Ancient Roads: the Role of Heritage in the Development of Trekking Tourism in South Turkey
3. 学会等名 International Conference on Future of the Past: Tourism and Cultural Heritage in Asia (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Eisuke Tanaka
2. 発表標題 From Obsoleted Footpaths to Heritage: Reconfiguration of Old Roads in the Context of Tourism Development in South Turkey, (P107) From paths to roads: the transformative capacities of roads on movement and relationships
3. 学会等名 Staying, Moving, Settling 15th EASA Biennial Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中英資
2. 発表標題 誰の遺産か？トルコ国民意識の構築と古代アナトリア諸文明
3. 学会等名 金沢大学新学術創成研究機構文化遺産国際協力ネットワークユニット主催国際シンポジウム 越境する文化遺産
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 ロス・バーンズ、松原 康介、前田 修、谷口 陽子、守田 正志、安田 慎	4. 発行年 2023年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 528
3. 書名 ダマスクス 都市の物語	

1. 著者名 ロス・バーンズ、松原 康介、柴田 大輔、藤田 康仁、杉本 悠子、川本 智史	4. 発行年 2023年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 368
3. 書名 アレppo 都市の物語	

1. 著者名 塩谷哲史	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 60
3. 書名 転流：アム川をめぐる中央アジアとロシアの五〇〇年史	

1. 著者名 布野修司	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 972
3. 書名 世界都市史事典	

1. 著者名 松原 康介	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 400
3. 書名 地中海を旅する62章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>筑波大学教員総覧 https://trios.tsukuba.ac.jp/researcher/0000000877 都市文化共生計画研究室ホームページ https://infoshako.sk.tsukuba.ac.jp/~matsub/index.html 都市文明の本質 http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city/index.html 中東都市多層ベースマップシステム http://asp.netmap.jp/mebasemap/index.html</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	谷口 守 (Taniguchi Mamoru) (00212043)	筑波大学・システム情報系・教授 (12102)	
研究分担者	中野 茂夫 (Nakano Shigeo) (00396607)	大阪公立大学・大学院生活科学研究科・教授 (24405)	
研究分担者	藤田 康仁 (Fujita Yasuhito) (00436718)	東京工業大学・環境・社会理工学院・准教授 (12608)	
研究分担者	田中 英資 (Tanaka Eisuke) (00610073)	福岡女学院大学・人文学部・教授 (37118)	
研究分担者	木村 周平 (Kimura Shuhei) (10512246)	筑波大学・人文社会系・准教授 (12102)	
研究分担者	川本 智史 (Kawamoto Tomofumi) (10748669)	東京外国語大学・世界言語社会教育センター・講師 (12603)	
研究分担者	渡邊 祥子 (Watanabe Shoko) (20720238)	東京大学・東洋文化研究所・准教授 (12601)	
研究分担者	武藤 亜子 (Muto Ako) (20848907)	独立行政法人国際協力機構(緒方貞子平和開発研究所)・緒方貞子平和開発研究所・上席研究員 (82808)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中島 直人 (Nakajima Naoto) (30345079)	東京大学・大学院工学系研究科(工学部)・准教授 (12601)	
研究分担者	塩谷 哲史 (Shioya Akifumi) (30570197)	筑波大学・人文社会系・准教授 (12102)	
研究分担者	谷口 陽子 (Taniguchi Yoko) (40392550)	筑波大学・人文社会系・准教授 (12102)	
研究分担者	廣井 悠 (Hiroi Yu) (50456141)	東京大学・大学院工学系研究科(工学部)・教授 (12601)	
研究分担者	柳沢 究 (Yanagisawa Kiwamu) (60368561)	京都大学・工学研究科・准教授 (14301)	
研究分担者	山内 和也 (Yamauchi Kazuya) (70370997)	帝京大学・付置研究所・教授 (32643)	
研究分担者	田中 暁子 (Tanaka Akiko) (70559814)	公益財団法人後藤・安田記念東京都市研究所(研究部)・研究部・主任研究員 (82673)	
研究分担者	守田 正志 (Morita Masashi) (90532820)	横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・准教授 (12701)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐倉 弘祐 (Sakura Kosuke) (90757220)	信州大学・学術研究院工学系・助教 (13601)	
研究分担者	杉本 悠子 (Sugimoto Yuko) (80822957)	早稲田大学・文学学術院・助手 (32689)	削除：2021年12月17日
研究分担者	安田 慎 (Yasuda Shin) (60711653)	高崎経済大学・地域政策学部・准教授 (22301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計8件

国際研究集会 Tabliz Ivent MA “In-Between”	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 2019年第一回地中海アーバニズム研究会	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 5th Meeting for a planning study on the multilayered urban fabric in the Western Asia	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 8th Meeting for a planning study on the multilayered urban fabric in the Western Asia	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 国際開発学会大会企画セッション：シリアの文化遺産協力において日本の経験が果たすもの	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 国際開発学会大会企画セッション：躍動するミャンマーの都市計画と国際協力の可能性	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 国連開発計画シリア人文化財研修（国内）	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 国連開発計画シリア人文化財研修（レバノン）	開催年 2018年～2018年

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------